

Vent

音楽教育 ヴァン

vol. 58

巻頭インタビュー

小沼純一

音楽の周囲を巡る思考

レポート

子どもも教師も、
全校で心をつなぐ「スマイルタイム」

特集

新しい「高等学校 芸術科 音楽I」の教科書
『高校生の音楽1』『MOUSA1』のご紹介
[高等学校用教科書 内容解説資料]

参考楽譜

リコーダー重奏(合奏)

『野ばらメドレー ～レハール、シューベルト、ヴェルナー～』

(編曲: 佐井孝彰)



子どもと教師が共に育つ音楽活動

今回の『ヴァン』58号には徳島市佐古小学校の音楽集会「スマイルタイム」がレポートされています。佐古小というと、かつて合唱でNコン全国コンクール金賞、現在は全日本小学生金管バンド選手権5年連続グランプリ獲得と音楽強豪校のイメージが強いかもしれませんが、日常的教育活動を垣間見ますと、日頃の学ぶ姿勢や基礎・基本をいかに大切にされているかがわかります。

実は、2009年の『ヴァン』12号「授業者に訊く」には当時の佐古小・冨田操先生のインタビューが掲載されていますが、そこで小見出しになっている「日常の態度が大切」「基礎・基本の積み重ね」「歌声づくりは低学年から」「音楽的なボキャブラリーを増やす」などは、今なお学校の伝統として受け継がれています。しかも佐古小の凄いところは、子どもにそれらを指導するだけではなく、教師自らが学び手として実践している点です。それによって、日常の授業とスマイルタイム、クラブ活動がリンクし、子どもと教師が共に育つ相乗的効果を生み出しています。金管バンド部の歌心あふれる演奏は、音楽の授業やスマイルタイムで育まれた音楽性の表れに他なりません。

久しぶりの公開スマイルタイムには驚くほど大勢の地域の方々が訪れました。学校の音楽文化がしっかりと地域に根付いている証しと言えるでしょう。

佐野 靖（徳島文理大学 教授・東京藝術大学 名誉教授）

Contents

- 3 | 巻頭インタビュー
小沼純一（音楽・文芸批評家）
- 8 | レポート
子どもも教師も、全校で心をつなぐ「スマイルタイム」
- 12 | 授業者に訊く【特別事例編】
伊藤範秋（北海道高等学校遠隔授業配信センター（T-base）教諭）
- 17 | 特集
新しい「高等学校 芸術科 音楽Ⅰ」の教科書
『高校生の音楽1』『MOUSA 1』のご紹介
[高等学校用教科書 内容解説資料]
- 30 | インタビュー〈下〉
覚 和歌子（作詞家・詩人）
- 34 | Kyogei Presents
音楽診断
[第23回] ピアノ協奏曲編（監修・解説：山田治生）
- 36 | Information
- 38 | 参考楽譜
リコーダー重奏（合奏）
『野ばらメドレー ～レハール、シューベルト、ヴェルナー～』
（編曲：佐井孝彰）
- 42 | エッセイ
新・音から広がる世界 [第18回] 藤原道山

A portrait of Junichi Komatsu, a middle-aged man with grey hair and glasses, wearing a black turtleneck and a dark blazer. He is smiling and has his hands clasped in front of him. The background is a warm, textured brown with a hint of green foliage on the right.

巻頭インタビュー

音楽の周囲を巡る思考

Junichi Komatsu

音楽・文芸批評家 小沼純一 聞き手 ヴァン編集部

いつの時代も、私たちの環境はさまざまな音楽に彩られてきました。自分自身が慣れ親しんできた音楽やその環境について、思いを巡らせたことはありますか？本インタビューでは、音楽文化を軸に多角的で独自のスタイルの著述を展開されている音楽・文芸批評家の小沼純一先生に、音楽や執筆に関する思いを伺います。音楽があふれる世の中で、今、目の前にあるものに対してどう向き合い、どう感受するか、小沼先生のこれまでのご経験を振り返りながら、さまざまに語っていただきました。

新しい響きを求めた少年時代

Vent (以下、V) : 今号の特集「新しい『高校生の音楽1』『MOUSA 1』のご紹介」にちなみ、小沼先生の学生時代、特に音楽に興味をもち始めた頃のお話を伺いたく思います。ご自身にとって音楽が特別なものに感じられたのはいつ頃でしたか？

小沼 : だいたい小学校4年生くらいですね。その頃から作曲への興味が湧いていました。特に何かきっかけがあったというわけではなく、ピアノを習ったり家にあるレコードを聴いたり、そういう環境の中でしだいに芽生えたものだったと思います。今思えば、自分がいる環境でどういう音楽が流れていたかというのは重要だったと感じます。

V : 当時聴いていた曲で印象深いものはありますか？

小沼 : たくさんありますが、例えば『シェルブールの雨傘』やビートルズの作品、それからベートーヴェンの「運命」やドビュッシーの「海」などは、当時自分の少ない小遣いで買ったレコードとして思い出があります。あとは、少し珍しい体験だと思いますが、通っていた小学校でフランス民謡やフラ

ンス国歌を習って、それはいまだに記憶に残っています。

V : ジャンルが多様ですね。初めからさまざまな種類の音楽に関心をもっていらっしゃったのですか？

小沼 : そうですね、テレビやラジオの音楽番組の影響が大きかったと思います。毎週同じ番組を見ていてもクラシックやジャズ、あるいは当時はやりの歌謡曲などさまざまな特集があったし、他にも洋画の中で流れている曲や、親が連れて行ってくれるミュージカルとか、そこにジャンルとしての区別はなくなじんでいたという感じです。作曲を試みていた頃は、ドビュッシー、ラヴェル、サティ、ストラヴィンスキーの曲がわりと自分のベースとしてありましたが、そのあたりを聴いていると、ジャズやロックを聴くのとそんなに違和感ないんですよ。ロックはストラヴィンスキーの影響があったり、ジャズではドビュッシー的な和音や旋法が使われていたりするからなんでしょうね。

V : ご自身の環境の中にある音楽に敏感に反応されていたのですね。

小沼 : 新しい響きが知りたかったということじゃないでしょうか。当時は「へえ、こんなもあるんだ」くらいの表面的な理解だったと思いますが、30〜40代になったときに、自分がなじんできた音楽が腑に落ちるといえるのか、深いところで分かる感覚がありました。

並行する存在としての「言葉」

V : 小沼先生は音楽や映画のことを言葉で表現されたり、またご自身で詩を書かれたりもしていますよね。弊社の教科書口絵にもすてきな文章を寄せていただきましたが、言葉や詩作への興味も学生の頃からあったのでしょうか？

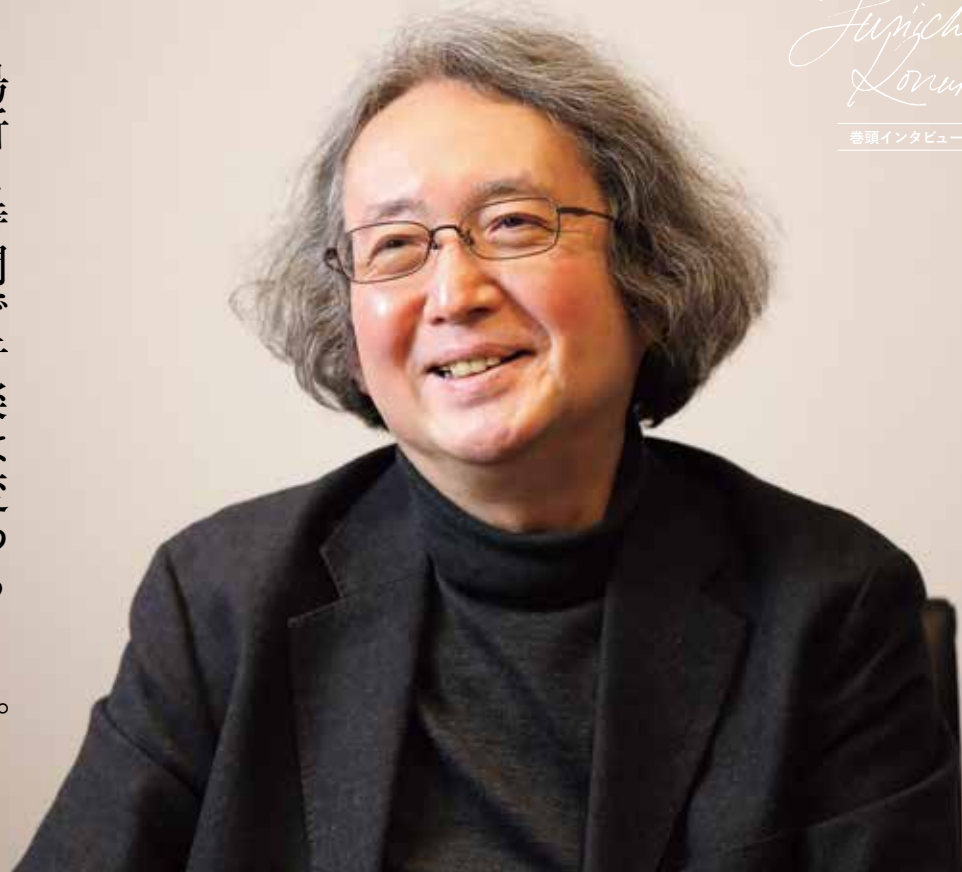
小沼 : それも音楽と並行してあったんです。一日中音楽を聴いていることもありましたが、BGM的な流し聞きはできなくて、ちゃんと聴いてしまうので耳や頭が疲れちゃうんです。そうすると本を読む。勉強はせずにそのどちらかで時間が成り立っていました(笑)。熱中して聴いていてもやっぱり音楽と距離は保ちたいと思うから、演奏家という選択はなくて、ただ音楽をただ鑑賞するわけでもなくて、そうしていくうちに、その音楽について考えて言葉にするようになったんじゃないかな。

V : どちらも切り離せないものだったのですね。

小沼 : 大学で文学を専攻するようになってからも作曲家が書く文章というのには興味がありましたね。特に武満 徹、林 光、三善 晃、高橋悠治、湯浅譲二、近藤 譲などの作曲家、具体的に音を扱っている人の文章というのはよく読み



場所と時間で音楽は変わる――。
変化を肯定し、違いを感じる事が
大事だと思います。



ました。作曲をするにあたって言葉で何か言えることは大事だと思っていて、音楽と言葉というのは自身の中で並行するものだったんです。それから詩などを書くようになり雑誌に載り始めた頃には、音楽を言葉にすることに対しても自分なりのスタイルや考えが確立し始めて、それぞれが自分の中で一致してきた感じでしたね。

V: 言葉を介す中で、音楽と密接だと感じる分野はありますか？

小沼: そこは音楽を聴きながら言葉にしながら、だんだんと変わっていききましたね。最初に関心があったのは西洋芸術音楽における作曲家論、いわゆる作曲家とその作品などでしたが、深めていくうちに楽器を弾く人、あるいは聴く人の身体性とか、場所との関係性にも及びました。そうした作曲の周辺を取り巻く思考はポピュラー音楽や民族音楽にも広がって、そのどれもが密接に関わっていると考えられるようになりました。

音楽はどこにあるのか

V: 著書の中で述べられた「そもそも楽譜は音楽ではなく、音楽のための設計図、見取り図である」という言葉がとても印象的でした。楽譜が読めない音楽はできないと、音楽と読譜をセットのように捉え、そこにハードルを感じてしまう人も少なくないと思います。

小沼: そもそも楽譜、いわゆる西洋の五線譜が日本に入ってくるのは明治期以降です。それ以前の、例えば声明など

は楽譜と言ってももっと自由度の高いものでしたし、民謡の場合は口承により楽譜のないものも多くあります。そういう意味で、西洋的な楽譜にとらわれている部分はあるかもしれないですね。加えて言うと、五線譜では、音の高さと長さはちゃんと表せても、音色や動きはうまく書けない。西洋芸術音楽では、そういうグルーブというか、ノリやリズム感は楽譜から切り離して先生から教わった。つまり、音楽は楽譜だけでは存在しないということです。

V: 学校教育の場でも読譜の習得にとらわれ過ぎずに、いい意味で「楽譜は音楽の全てを表すものではない」ということを指導につなげられたらいいですね。

小沼: 大事だと思います。ただ、楽譜というのは記憶の補助としてすごくうまくできている。文字などと同じで、後世まで残すことができ、読み方さえ分かれば別の場所でも通じる。時間や場所を超えることができるツールです。だから楽譜はあったほうが便利だけど、ある種のことを読み取る方法の一つであって、それが全てではない。それ以外の部分と両輪のようにして、ちゃんと学べるといいですね。

V: 楽譜と音楽の関係性について感じることはありますか？

小沼: 楽譜の中には1音1音に対してこうあるべきだと、とても細かく書かれたものもあります。しかも作曲家と奏者が一緒にやりながらだとうまくその意図を伝えることができる。だけどその場合、作曲家が亡くなってしまったら、曲の再現性はどこまで保たれるのでしょうか。今は録音があるのである程度は音による準拠が可能ですし、それは楽譜よ



取材は2025年3月6日、教育芸術社で行われた

りももっと生きた音でしょう。でもちゃんと聴き取ることができなければ、それはある意味で楽譜とあまり変わらないと思うんです。また別の角度から見ると、作曲家、あるいは楽譜や録音、そうしたもののから離れることで、その音楽は自由になったとも言えるのかもしれない。だから、音楽がどこにあるのかというのは、ほんとうに難しいですね。

音楽があふれるこの時代に

V: 先生のご著書『小沼純一作曲論集成』(2023年、アルテスパブリッシング)には、「音楽がわずらわしいと感じる時代に」という副題が添えられていますよね。今のご自身を取り巻く音楽的環境をどのように感じていますか？

小沼: 今ってどんなところでも音楽が鳴っていますよね。耳に入ってくるものが多すぎるというか、それをわずらわしいと感じることがあります。それは、私自身が新しい音楽を今、特別に必要としていないということもあると思います。今まで聴いてきたもの、蓄えたものが頭の中にずっとあって、おそらくそれらをまだ本当の意味では消化しきれていないんです、きっと。

V: これまで聴いてきた音楽に立ち返るときは、当時の記憶がよみがえるのでしょうか？

小沼: それはあまりないですね。自分が今現在進行形なので、その当時との環境も違いますし、年齢を重ねて聴こえ方も変わっている。その時々自分として聴いている感じです。

V: 今ではサブスクが主流になり、ほんとうにたくさんの音楽や演奏を聴くことができますよね。かつて名曲・名盤と言われていたものは、今後どうなると思われますか？

小沼: 評価は変わってくるかもしれないですね。一方で、そういうものを残したいという発想もある。坂本龍一が「コモンズ・スコラ(commmons: schola)」というシリーズでCDブックをつくったのはまさにそれをやりたかったというのがあると思います。ただ、スタンダードと言っても、演奏そのものはその時代で変わるので……。例えばフルトヴェングラーや、カラヤンに代表される第二次世界大戦以降の時代の演奏には、何か凝縮された表現というのがあった。それはすごい名演かもしれないけど、今の聴き方からすると違うと感じる人もいるでしょう。最近では、楽譜に忠実で技巧性を前面に出した若手の演奏家などが人気だったりします。それがほんとうにおもしろいのか？というところもまたちょっと別だと思うんです。決して上手でなくても味がある演奏というものもありますし、そういうのは計量化できないはず。技術的にうまい人たちがもてはやされる今の世の中では、もしかすると聴き手もそういう時代に即したデジタルな聴き方に準拠しているのかもしれない、そこはどうなのかな……。

V: そうした聴取の側面において、先生が若い世代に伝えたいことはありますか？

小沼: 時間をかけてちゃんと聴くことでしょ。サブスク世代の子たちの間では、ちゃんと1曲を聴かずに、いわゆる飛ばし聴きというのが主流になっているそうです。そこは問題かなという気がします。いちばん伝えたいのは、その場所と時間で音楽は変わるということです。例えば、同じレコードを今聴いて、1時間後、1日後にまた聴く。流れているものは同じかもしれないけど、聴いている人が変わっています。初めて聴くのと、2回目とでは聴き方が変わっていますし、その間に何か食事をすれば身体が変化しているはず。その変化によって、音楽がよりおもしろく感じることもあれば、その逆もある。挙げればキリがありませんが、何人で、どんな場所で聴くのかでも異なりますし、録音物の場合にはヘッドホンか、スピーカーで聴くのかでも違う。要するに、変化を肯定し、違いを感じるのが大事だと思います。

V: テクノロジーの進化によりいつでもどこでも音楽を聴ける世の中ですが、その一つ一つがかけがえのない音楽体験であることを心に留めておきたいですね。

小沼: そうですね。例えばコンサートなどに行って、一定時

間ほかのことをしないで聴くというのは悪くないと思いますよ。ホールではよく聴こえる場所と、そうでない場所というように、座席のランク分けがされていることがあります。でも、「そうでない場所」にもその座席でしか聴こえない音があるんです。隣の席ともまた違うし、もっと言えば、演奏者と聴衆では、全然違う音が聴こえていたりする。だから、いい席なんて実はないと私は思っていて、どんなところにいても、その音はそこでしか聴こえないということを大事にしたいですね。

音楽の背後にあるもの

V: サブスクの台頭による手軽さやその多種多様さがかえって新しい音楽との出会いを難しくしているようにも感じます。子どもたちが今後さまざまな音楽に触れるための、何かアドバイスをいただけますか？

小沼: それはつまり、今自分が聴いているものではないものをどう探すかという話ですね。かつてのガイドブックに代わるようなもの、例えば、好きなアーティストがどんなものを聴いているか、そのプレイリストを探るというのはありかもしれない。あと、サブスクというのはだいたい似たような雰囲気のものをお薦めしてくるので、自分とは全くタイプの違うものを聴いている知り合いを頼ると何かを得られるかもしれないですね。やはり人に聞くというのがいちばんだと思います。同じような環境にいと似たものを聴いているかもしれないので、どのように裏切られるかを考えるだけでもおもしろいのではないのでしょうか。

V: 意識的に視点を変えるというのは大切です。

小沼: 無意識のうちに変わる場合もあります。例えば、バンドをやっていてロックばかりを聴いていた人が、結婚し子どもができると、鼻歌まじりに「ぞうさん」などを歌うようになる。人はこうやって聴くものや聴き方が変化するんです。だから興味さえあれば、広げようはいくらでもあると思います。私は大学の授業の中で、50年前に聴かれていた音楽を流すというのをよくやります。今年だったら、1975年に流れていたものですね。一般的な歌謡曲やロック、映画音楽などさまざまなジャンルのものが耳に入っていた。じゃあ100年前、1925年にはどんな音楽があったかなと調べていくと、録音が残っていないものも多いですが、その数少ない中から1つのジャンルを取り上げて比較してみると1975年のものとの相違点が見えたりする。それは文化や時代背景を映しているなどということも分かってくる。そんなふうに時空感を自分で決めて、音楽から世界を広げていけるとよいですね。

V: そのように思考を展開できれば、授業の中での音楽鑑賞がより広がりをもったものになりますね。

小沼: そうですね。自分の学生時代を思い返してみても、音楽を聴くときにもう少し歴史感覚というのをもっていたら、もっとおもしろかっただろうなと思うことがあります。例えば、バッハからモーツァルト、ベートーヴェン、シューマンって、音楽が違う。違うことは分かるけど、どうして違うのか、何が違うのかはピンとこないという場合が往々にしてあります。そういうときは、想像力を働かせてみるんです。単なる時代の移り変わりということではなくて、作曲家として毎日食べていくために稼がなくてはならないし、恋愛もするだろうしとか、隣の街まで行くのに歩いてたのか、馬車やメトロを使ったのか、そんなことを知るだけでも違いが見えてきて、そんな中でわざわざ音楽をつくる職業になった人ってどうなのかな？とさらなる興味が湧くかもしれない。そんなふうに、音楽の背景にあるものをいろいろな形で考え合わせてみてください。



● 小沼純一(こぬま・じゅんいち)

音楽を中心にしながら、文学、映画など他分野と音とのかかわりを探る批評をおこなう。現在、早稲田大学文学学術院教授。批評的エッセイとして『本を弾く来るべき音楽のための読書ノート』『武満徹 遺言』『音楽に自然を聴く』『映画に耳を 聴覚からはじめる新しい映画の話』ほか、創作に『sotto』『しっぽがない』『ふりかえる日、日 めいのレッスン』ほか。編著に『武満徹エッセイ選』『ジョン・ケージ著作選』『柴田南雄著作集I〜III』ほか。2015-6年にはシンガポール、ソウル、東京でおこなわれた国際交流基金主催のコンサート『村上春樹を「聴く」』の監修もおこなった。NHK Eテレ『schola (スコラ) 坂本龍一音楽の学校』(2010-2014)のゲスト講師としても出演。



子どもも教師も、 全校で心をつなぐ「スマイルタイム」

コロナ禍や働き方改革、さまざまな時代の潮流により、今、学校行事の在り方が問い直されています。そのような中、日常の教育活動の傍ら、児童も教師も全力で集会に取り組んでいる学校があります。本記事では、令和6年11月1日に徳島市佐古小学校で行われた音楽集会「スマイルタイム」の模様を紹介するとともに、音楽科の青山裕子先生と佐野靖先生（徳島文理大学 教授・東京藝術大学 名誉教授）による対談をお届けします。

佐古小学校の「スマイルタイム」は、全校が一体となり音楽活動に取り組む集会です。音楽に対する関心・意欲を高め、音楽の生活化を図る場であるとともに、全校児童が共に歌ったり演奏したり、聴き合ったりすることを通して、感動を分かち合い、互いのよさを認め合い、心をつなぐことを目的としています。15年以上続けられている本集会は、朝の時間を使って今月の歌を歌う「S（ショート）」と、低中高の各学年で演奏を披露する「L（ロング）」との2種類で構成され、年間を通して複数回実施されます。今回ご紹介するのは、コロナ禍を経て5年ぶりの一般公開となった「スマイルタイムL」。約500名の全校児童と教員、そして保護者や地域の方が一堂に会する機会となりました。





中学年の発表



低学年の発表



高学年の発表



全校合唱『君をのせて』のワンポイント・アドバイス

充実のプログラム

集会は金管バンド部による生演奏からスタートし、演奏とともに児童が体育館へと入場します。華やかな金管楽器の音と会場に集まった大勢の観客を前に、児童の表情からは高揚感が伝わってきます。全員の準備が整ったところで、オープニングには欠かせない曲『世界の子どものマーチ』を全員で合唱。金管バンドの軽快な伴奏と体育館いっぱいに明るく響く歌声で会場を魅了しました。

発表の始まりは中学年による『ハロー サミング』（リコーダー奏）と『バレード ホッホー』（合唱）です。『バレード ホッホー』では1番と2番の間に手拍子によるリズムアンサンブルを加え、アレンジの効いた演奏を披露しました。続く低学年は『ジェットコースター』、『どれみのキャンディー』を振り付きで歌唱。全身を大きく使い、元気いっぱい表現しました。そして、最後は高学年による『ラバーズ コンチェルト』（リコーダー奏）と『Wish ～夢を信じて』（合唱）です。発表の前に演奏のポイントや聴きどころを説明し、曲のよさを生かした整った響きで、上級生らしさを示す演奏となりました。

会場を盛り上げるのは児童の演奏だけではありません。「歌のお兄さん、お姉さん」と呼ばれる司会進行役の先生と、集会の実行委員である「チームスマイル」の児童

が登場し、歌番組や音楽ライブさながらのトークを展開。発表の感想を聞いたり、コールアンドレスポンスなども交えたりしながら会場をさらに温めました。

心を一つに

集会のラストを飾るのは、全校生による今月の歌『君をのせて』の合唱です。歌唱後には指揮を務める佐伯先生によるワンポイント・アドバイスを実施し、曲の山に向けて感情を乗せて歌う表現の工夫を行いました。佐伯先生の熱のこもった指導に児童の歌も磨きがかかり、最後は観客のもとまで届く情感のある演奏に仕上がりました。全プログラムが終了し、児童は充実した表情で『世界の子どものマーチ』を再び歌いながら退場します。この日いちばんの手拍子と大きな拍手に包まれる中、集会は締め括られました。

「スマイルタイム」では、児童と教師が心を一つに音楽を存分に楽しみ、観客も巻き込んで会場全体で温かな気持ちを共有している様子が印象的でした。同じ場所にみんなが集うことの難しさを知る今だからこそ、その価値をあらためて感じます。こうした全校で心を通わす取り組みが、今後もより一層広がっていくことに期待します。

（ヴァン編集部）

INTERVIEW

インタビュー

日々の積み重ねの中で

佐野：充実したプログラムで見応えがありました。練習はどのくらいされましたか？

青山：ふだんの授業である程度歌えるようにし、今週からは低中高学年で別々に集まって3回合わせました。互いに見せ合うと本番の新鮮さがなくなるので全校そろって練習しません。音楽の授業は週に1、2時間と限られていますが、今週だけ特別時間割を組み、3時間いただきました。他教科への負担が大きいと継続が難しくなるので、カリキュラムに無理をさせないようふだんの活動の続きでできる内容を考えています。

佐野：日頃の授業ではどのような指導を心がけていますか？

青山：教材ごとに、この曲をもっとよくするにはどうしたらいいかを子どもたちに考えさせています。低学年の場合は、まず楽しみながら音楽の基礎基本を身に付けさせることを大切にしています。そのうえで考える授業を心がけています。中高学年では一歩進んで「どうしてそうしたいと思ったの？」と聞くようにし、これまでの学習と関連させた発言を促します。そういうやり取りを通して音楽をつくっていく感じですね。

佐野：やはり最初が肝心ですね。低学年のうちにしっかりと指導ができるかどうか、3年生以降の積み重ねに大きく影響しますよね。

青山：そうですね。日頃の積み重ねで言うと、各学級で今月の歌を毎朝歌っています。先生方には「大きな声で頑張って歌おう」ではなく、「響かせて」や「明るい声で、遠くに届けて」など言葉の使い方にも気を付けていただいています。

佐野：今月の歌は月ごとに曲が変わりますよね。6年間だと、かなりの曲数を用意しないといけなくて大変ではないですか？

青山：毎年は変えていないです。曲順を入れ替えたり新しい曲を入れたりすることはありますが、基本的には1年



進行を務める「歌のお兄さん」と「チームスマイル」の児童



発表の感想を聞く「歌のお姉さん」

生のときに覚えた曲を6年間引き継いで歌います。

佐野：なるほど。曲が変わらないということは、逆に自分の変わったところがよく分かりますよね。歌えるようになった部分が増えたり、対旋律でうまく重ねられるようになったり、曲によっては歌っていく中で自分がだんだん上級生になっているのを実感できるのでしょうか。

青山：今月の歌では少し対旋律が加わる曲などに挑戦していますが、この全校合唱のおかげで低学年の頃から違う旋律が聴こえてくるのに慣れているので、パートナーソングのように2つの旋律を重ねたり、3度でハモったりすることも比較的スムーズに進められます。これも積み重ねによるものと思います。

失敗したっていい

佐野：3回の合わせであの仕上がりは立派だと思いました。むしろちょうどいい練習量なのではないでしょうか。進行などのしっかりとした構成はあっても、その場の思いがけない感動や出会いもあるから子どもたちは楽しみだと思います。練習しないのはダメですが、やりすぎて本番の感触が分かりきっているよりも、もっとやりたいくらいのところまで終えて、どうなるか不安くらいで本番を迎えたほうが、緊張感があっていいのかもしれない。そのバランスは難しそうですね。

青山：失敗してもいいんです。「もう1回やってみよう」とふることもできますね。今日も進行役の先生にはうまくできなかったらやり直していいよと伝えていました。

佐野：失敗を共感的に受け入れてくれる「場」があるから子どもも先生も恐れずにチャレンジできるのだと思います。「歌のお兄さん」を務めた先生もパフォーマンス力があってなかなかのキャラでしたね（笑）。

青山：今回は若手の先生が立候補してくれましたが、きっとこれから先のさまざまな指導の役に立つと思います。進行役だけでなく、各学年の指揮も学級担任の先生が率先してやってくれています。中には、指揮をするのが初めてという先生もいますが、何度も練習を重ねて、今日の本番に臨んでくれました。



運営に携わる「チームスマイル」の児童と入退場の演奏を務める金管バンド部
開校150周年を機に新調されたそろいの黄色いTシャツが目印

佐野：みんなが腰を上げてくれるような雰囲気がこの学校はもっているのですね。それが子どもたちにも伝わって、学校全体のやる気につながっているのだと思います。佐古小に訪れて実際に見聞きしていると、なんというか、外から見たイメージと全然違って……。

青山：どんなイメージをお持ちでしたか？

佐野：金管バンド部が全国4連覇していたり合唱部も精神的に活動していたり、いわゆる音楽の強豪校のような印象がありました。もちろんやっていることはすごいのですが、部活動の指導は大きな意味での教育の一環であって、それがコンクールの結果に表れている。スマイルタイムと授業、それから部活動がうまくリンクしている感じがしますね。こちらの金管バンド部はとても歌心のある音楽性豊かな演奏をするので、やはりスマイルタイムでの経験や歌声づくりが関係していると思います。特別な学校だからではなく通常の教育の一環としてやりつつも、こういう形で花開いているところがすばらしい。

なくてはならないもの

佐野：今年度のロングは今回が初めてなのですね。

青山：そうなんです。以前は1学期に一度行って、慣れた2回目を保護者に見てもらっていましたが、今は行事精選で回数の確保は難しいですね。

佐野：全国的にも集会などの行事は縮小傾向にあるようです。こうした学校全体で取り組む機会は貴重ですね。

青山：音楽教育研究大会（中国・四国大会）をきっかけに

続いている集会ですが、そのときの子どもたちの様子を見て、これは佐古小になくてはならないものだと思ひながら感じたというのが大きいと思います。教員が入れ替わっても、子どもたちが生き生きと歌うスマイルタイムを経験して必要性を感じてくれるようで、それが伝統として今につながっています。音楽自体も大事にしていますが、子どもたちが音楽を楽しむ中で、達成感を味わったりさまざまな気持ちのつながりを共有したりすることが、子どもたちの心の成長に大切なものであると先生方に伝わるのだと思います。

佐野：日常があってこそですが、やはりこうした非日常的な節目は大事ですね。それが子どもたちにとってだけではなく、教師や保護者、地域の方にまで及び、この町になくてはならないものになっているところがとても重要なんです。地域に開かれた学校というか、学校の存在意義の原点をこうした集会が表している気がします。



対談の様子

スマイルタイムを観て

数年ぶりに観させていただきました。初めて見学したときの感動そのままに、心洗われる時間となりました。これからもこの時間を大切にしていきたいと思っています。

観覧に訪れた保護者からの感想の一部をご紹介します。

近所に住む私の家には毎日皆さんの歌声が聴こえます。私の楽しみの一つです。全校が歌と演奏で一体になるスマイルタイム、感動しました。

学校の音楽活動でしか味わえない経験をさせていただいていることに、心より感謝申し上げます。“スマイルタイム最高、佐古小でよかった”我が子の感想です。



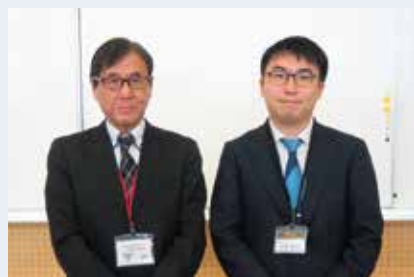
配信機材 (Zoom) 越しに行われる遠隔授業の様子

Ask the teacher

授業者に訊く

特別事例編

北海道高等学校 遠隔授業配信センター (T-base)



内藤淳一先生 (聞き手) と伊藤範秋先生 (授業者)

今回ご紹介するのは、北海道有朋高等学校を拠点とする北海道高等学校遠隔授業配信センター (通称:T-base) による遠隔授業です。

道立高校において、地域の小規模校の教員不足などにより、大学進学等の進路希望に対応した教科や科目の提供が困難な状況にあること、またその影響で大学進学を目指す生徒が都市部に流出していることなどが教育課題となっています。ふるさとの発展に貢献する人材育成や、大学進学に対応した科目の提供を目的として令和3年に設置されたT-baseでは、令和7年4月現在、道内32の小規模校に向けて、9教科30科目の授業配信が行われています。

授業者の伊藤範秋先生はT-base専属の教員として、南茅部高校、利尻高校、常呂高校の3校へ「音楽I」を配信しています。今回の「授業者に訊く (特別事例編)」では、常呂高校への遠隔授業の様子取材しました。

授業者: 伊藤範秋 (北海道高等学校遠隔授業配信センター (T-base) 教諭)

聞き手: 内藤淳一 (作曲家・札幌大谷大学 客員教授)

本時の授業の位置付け

題 材: 「箏の響きを生かして演奏しよう」

教 材: 『さくら』等

本題材では、箏の基本的な奏法を確認したあと、さまざまな奏法を用いて『さくら』を演奏していきます。奏法の違いによる曲想の変化に注目しながら練習を進め、学習した奏法を選択して用いながらイメージをもって演奏します。本時は演奏の発表にあたる時間であり、遠隔授業の特性を踏まえ、端末を活用して学習をまとめていきます。

授業の流れ

学習の内容・学習活動	
導入	○前時までの学習を確認し、本時の流れを知る。 ・動画で基本的な奏法を確認するとともに、ワークシート(FigJam)の記入例を再度提示し、ここまでの学習の流れを確認する。
展開	○表現意図を整理し、ワークシートを完成させる。 ・『さくら』をどのように演奏するかについてワークシートに整理する。実際に演奏し、自分の考えを音にして確かめながら記入する。 ○ペアで演奏を披露する。 ・表現意図に基づいて演奏を披露しあい、交流する。演奏の際はお互いに撮影し、動画として記録に残し、Google Classroomに提出する。
まとめ	○本時の学習の振り返りをする。 ・振り返りシート(Googleスプレッドシート)に、箏の学習を通して「分かったこと・できるようになったこと」「今後に生かしたいこと」などについて入力する。

地域の小規模校へ向けた遠隔授業

遠隔授業による箏の学習

内藤：本日はありがとうございました。遠隔授業の配信現場を新鮮に拝見しました。まずは本題材における授業の進め方について教えてください。

伊藤：最初は正しい姿勢で、親指で弦を弾くところから始めます。基礎的な部分に少し時間を取りつつ、ピッツィカートや後押し、突き色、スクイ爪、合せ爪などの奏法を指導していきます。また、ワークシートを使った活動や交流を行います。『MOUSA 1』に掲載の『《さくら》変奏曲』などの発展的な楽曲も扱います。『さくら』の演奏において、これまで学習した内容を踏まえ、どんな奏法の組み合わせや表現ができるかを考えさせるというのが本時の課題でした。

内藤：調弦も常に画面越しに行っているのですか？

伊藤：生徒が授業中に柱を飛ばしても混乱しないよう、初回は受信校で直接指導します。細かな音程の調整は、授業のたびに遠隔で行っています。

内藤：年間指導計画の中で、秋頃から年明けにかけて箏の題材を配置しているのは、何かねらいがあつてのことでしょうか？

伊藤：楽器を扱う題材はなるべく初回

の授業を対面で行う必要があると考えているのですが、現実問題として受信校に行ける時期は限られています。移動が困難となる冬季よりも前に初回授業を設定し、そこから時間をかけて題材をこなすという計画です。

内藤：この題材は全部で8時間ぐらいを想定されているということでしたが、今後はどのような授業展開を予定されていますか？

伊藤：年明けに動画を使った交流会や、箏の奏法の学習を踏まえた『六段の調』『春の海』などの鑑賞を行います。正月はさまざまな場所で箏の音色に触れる機会があると思うので、こうした活動は生徒と箏との距離を縮めるきっかけにもなるかなと考えています。年内に実技を終え、年明けにその振り返りを交えながら、箏と自分たちの生活との関わりについて深められたらと思っています。

内藤：授業を通して、生徒の音程感覚が確実に身に付いてきているなと感じました。生の楽器に触れ、和の雰囲気が漂う空間をみんなで共有する。これはほんとうに大事なことだと思います。

伊藤：私は箏を専門に学んでいないので、授業では動画も活用させてもらっ

ています。私が一人で教えるよりも、いろんな教材の中で生徒が箏に親しんでもらえたらと思ってのことです。

対面を交えた授業計画

内藤：器楽もそうですが、鑑賞の授業はまさにデジタル教材の使いどころですね。

伊藤：遠隔授業において、1人1台端末の存在は大きいと感じています。これまでの鑑賞の授業は、音楽室のスピーカーで一斉に同じ箇所を聴くのが当たり前でした。私もその利点を実感する一方、あえて端末を使って『子犬のワルツ』のさまざまな演奏を個々で聴き比べるという授業をやりました。曲の概要を掴むところまではみんなと一緒にやって、そこからYouTubeのリンクを20個ぐらい並べたスプレッドシートを共有し、さまざまな演奏を聴き比べて、それぞれ感じたことを意見交流させるという内容です。これは対面授業でも使える案かなと思っています。

内藤：遠隔授業を通して培ったスキルは、対面授業でも生かし充実させる可能性を秘めていますよね。特に端末を用いた個々の学習は、生徒の興味・関心に応じた多様性が広がっていると思



遠隔授業に使用される機材。スイッチャーを用いて配信用カメラの切り替えや、受信校側のカメラの操作などでもできる



受信校(常呂高校)の授業の様子。教室に備え付けのカメラ、大型モニター、マイク、スピーカーなどを介し、1人1台の端末と箏を用いて授業を行う

います。年間指導計画はどのようにお考えですか？

伊藤：最初は定番ですが各校の校歌を歌います。遠隔授業は生徒との関係づくりが非常に重要です。「これから画面越しに授業をやるからね」と言いながら、2回目か3回目ぐらいの授業で突然配信先の学校に現れるんです。すると生徒は、「この人、やっぱり実在したんだ」ってびっくりします(笑)。対面の機会を交えながら生徒と関係をつくっていくのが4月から5月です。夏前にもう一度現地に行くのですが、そこではリズムアンサンブルなど遠隔での指導が難しい授業をやります。ほんとうは合唱もできたらと思っていますが、コロナ禍に始まった事業なので歌唱の遠隔実践はあまり深まっておらず、研究の必要性を感じています。

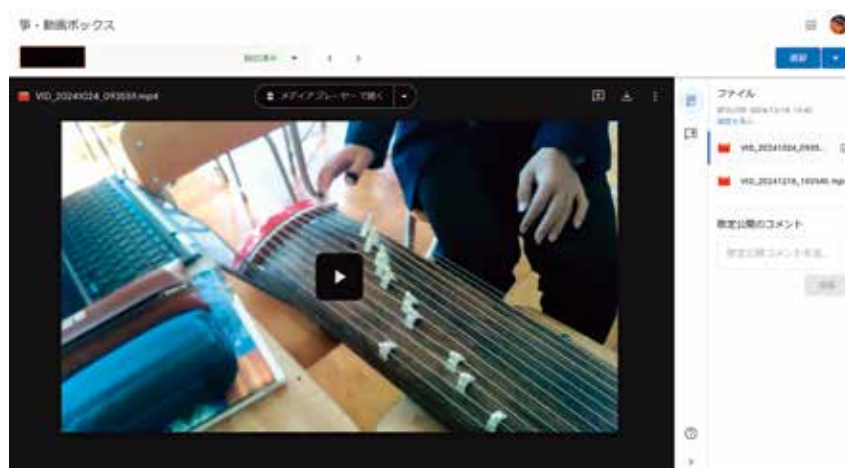
内藤：夏休み以降はいかがですか？



○内藤淳一(ないとう・じゅんいち)
作曲家・札幌大谷大学 客員教授



授業で使用されたワークシート (FigJam) の例



『さくら』の演奏を撮影した動画は、Google Classroomに提出することで共有される

伊藤：鑑賞を深めたり、Flat for Education を使って『かつこう』の旋律を用いた変奏の創作をやったりします。旋律の変奏はのちに箏の学習にもつながるため、こうした配列にしています。あとは、リコーダーを帯单元にして継続的に取り組み、年明けにかけてまとめていきます。

内藤：Flat 以外に授業で活用する学習支援ツールはありますか？

伊藤：配信センターでは「FigJam」を使っている人が多いです。それと、生徒一人一人の画面を確認できるよう「TFabTile (ティーファブタイル)」というツールを使っています。あとは

Google 全般ですね。

授業をつくるのは生徒たち

内藤：やはり題材によっては、遠隔でやりづらさを感じることもあるかと思います。

伊藤：創作などは学習支援ツールを使えばある程度個々で作業を進められますが、端末の操作などで躓いてしまう生徒も一定数います。そういう生徒に対して、一緒に考えたりアドバイスしたりできたらいいと思いますが、やはり遠隔ですと難しい。まあ平たく言うと全ての領域に難しさはありますが(笑)。

内藤：実技系のハードルは、小・中・



生徒の発言や行動を画面越しにくみ取りながら、コミュニケーションを交えて授業を行う

も違ってくるので大変ですね。

伊藤：配信センターの取り組みが始まった当時、学校ごとに時程もバラバラだったんです。でもそれだとさすがに運営が厳しいということで、道教委に依頼し、受信する学校の授業開始時刻を段階的に統一していただきました。ふだん授業をしていると対面授業とそんなに変わらない気持ちでいるのですが、実にさまざまな要素が絡み合い、いろんなかたがたの協力によって成立している尊い仕組みだと感じます。

内藤：各校で微妙に規定が違ったり、評価を出すタイミングが接近したりと、複数校に勤務する先生、そして遠隔授業ならではの苦労があると思います。

伊藤：学校によって授業をする教室や使用する端末なども違いますし、実に多様な対応を求められますね。

内藤：今後、高校に限らず小・中学校でも同様の取り組みが増えていくのではと思います。その最先端をいくモデル校として、校種を問わず全国の先生がたに向けて一言お願いします。

伊藤：私がこのセンターへ来たときに、ある先生から「音楽はきちんと遠隔授業ができるのですか？」と尋ねられたことがあります。遠隔授業ができる、できないを判断するには、生徒にとってその授業がきちんと意味のあるもの

になっているかどうかを考える必要があります。生徒に資質・能力を身に付けさせられなければ、それは授業として成立しているとは言えません。逆に、遠隔であっても資質・能力を身に付けさせることができるのであれば、授業の形は問われないんじゃないかと思うんです。例えば、DX（デジタルトランスフォーメーション）の中でさまざまな授業が試みられていますが、1人1台端末を活用することが、遠隔においても対面においても、指導の個別化を図るきっかけになるんじゃないかなと思っています。一方で、それが

何に結び付くのか、どんな力を育むことにつながるのかということを、忘れてはいけないと感じています。

内藤：端末は使うことが重要なのではなく、使った先に何があるのか、教師が目の子どもに対してどうアプローチするのかを考えることが重要です。

伊藤：授業の本質は忘れてはいけないと思います。

内藤：対面であれ遠隔であれ、アプローチの違いだけで、授業として目指すところは同じなのだと思えてきました。貴重なお話をありがとうございました。

校長先生より

北海道高等学校遠隔授業配信センターは、「夢は地元でつかみ取る。」をスローガンに、令和3年(2021年)3月、北海道有朋高等学校内に開設されました。当センターは、習熟度別授業や選択授業をベースとしながら、多様な進路を目指す全道各地の小規模校の高校生へのサポートに努めており、令和7年度は道立高校32校に、9教科30科目、週295時間の授業を配信しています。そのうち芸術科・音楽は「音楽I」を3校に配信しており、各校の教職員の協力を得ながら授業を実施しています。

伊藤先生は北海道教育委員会から「北海道高等学校教育課程改善会議構成員」として任命されるなど、校内外で幅広く活躍しています。本実践が遠隔授業はもとより、今後の芸術科・音楽の授業全般の発展につながることを心から期待しております。



阿部 穰先生
北海道
有朋高等学校 校長
北海道高等学校
遠隔授業配信センター
センター長

新しい「高等学校 芸術科 音楽Ⅰ」の教科書

『高校生の音楽1』

特集

『^{ムーサ}MOUSA1』のご紹介

[高等学校用教科書 内容解説資料]

令和8年度から高等学校用教科書『高校生の音楽1』『MOUSA1』が改訂されます。

教育芸術社では、音楽科の果たす役割を考えながら、学校教育における今日的な課題にも対応した、新しい時代にふさわしい教科書を目指して編集してまいりました。

コンセプト
人生を豊かにする
教科書



令和8年度『高校生の音楽1』

コンセプト
卒業後も手元に
残しておきたい教科書



令和8年度『MOUSA1』

本特集は、文部科学省による「教科書採択の公正確保について」に基づき、一般社団法人教科書協会の定める「教科書発行者行動規範」に則って編集しています。

新しい『高校生の音楽1』

人生を豊かにする教科書

音楽の多様な価値を見いだすことで、
この教科書に出会った人それぞれの人生が、少しでも豊かになるよう工夫しています。



(教科書P.2・3 口絵)

特徴 1 教材性の高い定番曲を厳選

幅広いジャンルから教材性の高い定番曲を厳選して
多数掲載しています。

特徴 2 各教材に学びのヒントを掲載

さまざまな視点から一つの作品にアプローチできる
よう、各教材に学びのヒントを掲載しています。

特徴 3 スモール・ステップを意識

小さな達成感を積み重ねられるよう、スモール・ス
テップを意識した構成にしています。

特徴 4 音楽の魅力や不思議に迫る 「音楽って何だろう？」

音楽そのものの魅力や不思議に、さまざまな視点から
迫るシリーズをさらに充実させました。

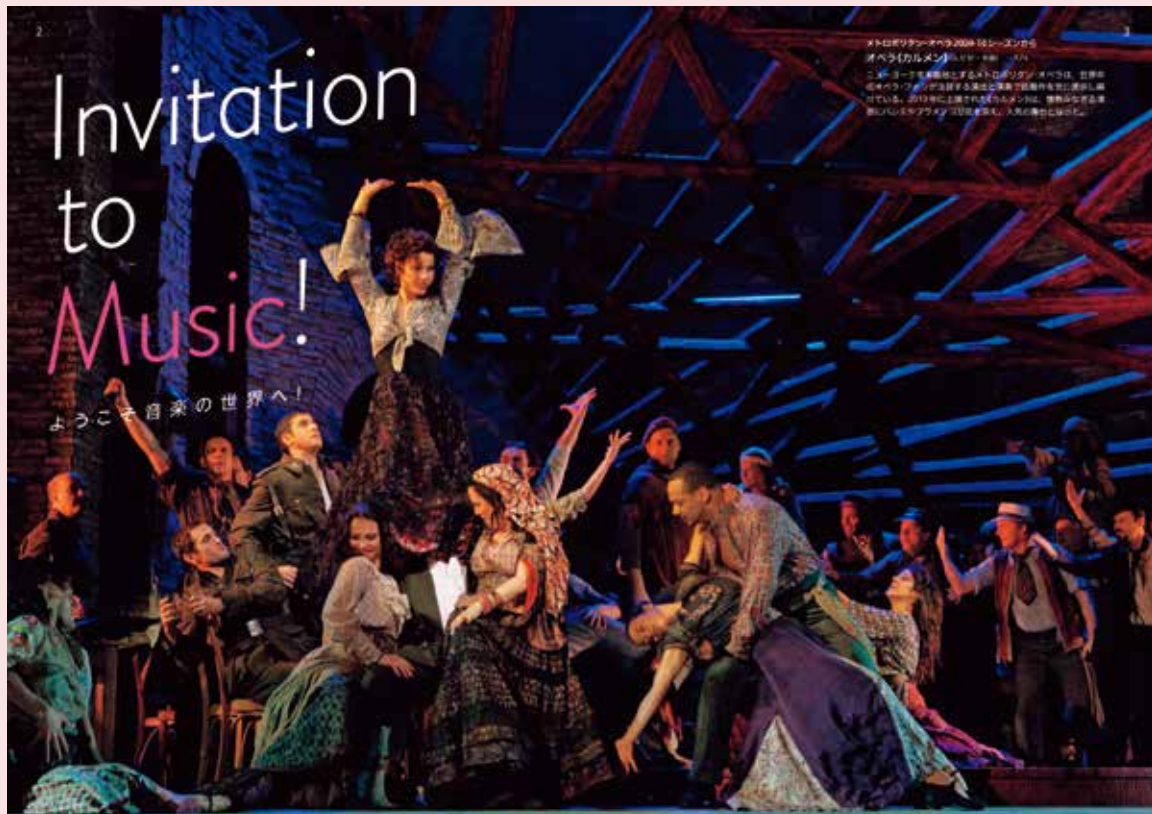
特徴 5 二次元コードコンテンツの充実

ピアノ伴奏、原語歌詞の朗読やリズム読み、器楽教
材の範奏動画をはじめ、授業に役立つコンテンツを
さらに充実させました。

新しい『MOUSA 1』

卒業後も手元に残しておきたい教科書

音楽の魅力を余すところなく伝えつつ、
より身近な存在となるよう、主体的、多面的な学びを意識して編さんしました。



(教科書P.2・3 口絵)

特徴 1 授業スタイルに合わせて選曲できる！

○ さまざまなジャンルから教材性の高い曲を厳選

「ジャンル別MAP」を示すことで、生徒が幅広く音楽と関わるができるよう、また、多様な状況に対応できるよう配慮しています。

特徴 2 どの教材も扱いやすい！

○ 生徒に日々接している先生方の実践的なアイデアを具現化

『MOUSA 1』に掲載している歌唱や器楽の全ての教材については、著者と編集部が試演を重ね、音域や演奏のしやすさなどを検討しました。また、創作では、生徒が取り組みやすい手順を示しています。

特徴 3 丁寧な学習プロセスの提示！

○ 生徒が達成感を得られる内容

これまでの個々の音楽経験に関係なく、全ての生徒が「楽譜を読めるようになった」「楽器を演奏できるようになった」と実感できるよう、段階を踏んで取り組める内容になっています。

『高校生の音楽1』は、新しく

1 「楽譜を読もう」新設！

読譜力を身に付けるために、12の小曲を掲載しました。機械的に練習するのではなく、音楽的感性を養いながら取り組める、完成度の高いものを取りそろえました。それぞれ拍子、速度、調、強弱、曲調などが異なるため、表現を工夫しながら読譜力を身に付けることができます。

無理なく取り組めるよう、スモール・ステップを意識した手順を提示

(教科書P14・15)

豊かな表現を促すピアノ伴奏音源を収録

各曲の読譜に必要な楽典の知識を、ページ下部に提示

2 《Happy Birthday to You》を6か国語で掲載！

世界中で広く歌われている曲《Happy Birthday to You》を、英語、韓国語、中国語、イタリア語、ドイツ語、フランス語の歌詞とともに掲載しました。外国語による歌曲に取り組む準備として、また国際交流イベントなどで活用することもできます。

(教科書P24)

生まれ変わりました！



3 新曲《ハルモニア・ステップス》！

基本の8小節のメロディーを繰り返しながら、斉唱から輪唱、混合二部合唱、混声三部合唱、混声四部合唱へと変化していく作品で、さまざまな形態による豊かな響きをこの一曲で味わうことができます。授業の始まりに行う発声練習としても最適です。

(教科書P50・51)

発声練習にも最適な基本の8小節のメロディー



こちらの二次元コードより、楽曲の一部をご視聴いただけます。

教科書に掲載されているものとは別アレンジによるピアノ伴奏音源を収録

4 「おじぎのコードを弾こう」新設！

授業の始まりと終わりに、生徒に「おじぎのコード」を弾いてもらいましょう。C→G→Cだけでなく、C→F→CやC→G→Amなどにアレンジすることで、楽しみながらコードに親しむことができます。

(教科書P66)

歌唱・器楽

スモール・ステップを意識し、さまざまなジャンルから教材性の高い定番曲を厳選して掲載しています。

歌唱 イタリア語の歌

- 《Santa Lucia》(サンタ・ルチア) ナポリ民謡
 《Bella ciao》(やあ 娘さん) イタリア民謡
 《Caro mio ben》(いとしの わがきみ) ジョルダニー
 《Nessun dorma》(誰も寝てはならぬ) プッチーニ

原語歌詞の単語の意味と日本語訳を掲載

《Caro mio ben》(いとしの わがきみ)	
Caro mio ben, / credimi almeno, いとしい 私の恋人よ、私を信じておくれ、	
senza di te / languisce il cor. あなたがいないと、私の心は弱り果てる。	
Il tuo fedel / sospira ognor. あなたの忠実な心を、私はいつもため息をつく。	
Cessa, crudele, / tanto rigor! やめてくれわがきみよ、過酷な仕打ちを!	

(教科書P33)

器楽 篠笛(スモール・ステップの例)

探り弾きしながら篠笛の音色を味わえる曲

- 《いしやきいも》《もういいかい》
 《たこ たこ あがれ》《ほたるこい》

篠笛の表現力の豊かさを味わえる曲

- 《荒城の月》《うさぎとかめ》

表現を工夫できる、やや難易度の高い曲

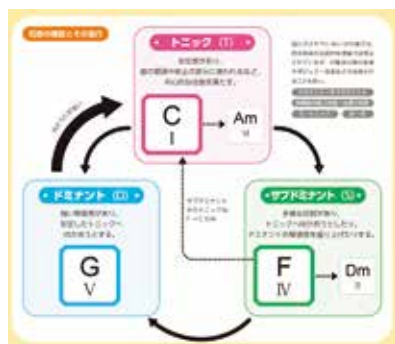
- 《鼓動の舞》

創作

「トニック」「ドミナント」「サブドミナント」の機能や基本的な和音進行を理解したうえで、和音進行を考えたり、和音と旋律でピアノ曲をつくったり、つくった曲をアレンジしたりする教材を掲載しています。

無理なく取り組めるようスモール・ステップを意識した紙面構成

和音の機能とその進行を理解する



和音進行を考える

和音進行を考えよう

① 音を弾きながら□に入る和音を下から選べ、□に和音記号またはコード・ネームを、五線に旋律を書こう。
 ただし、ここでの和音は音楽の基礎となる和音で用意されている和音と、同じ和音を連続して用いることはできないとする。これは厳格である。

② ①の和音進行を五線に記す。

③ ②の和音進行を五線に記す。

(教科書P83)

和音と旋律でピアノ曲をつくる

和音と旋律でピアノ曲をつくろう

① 前半と後半の和音進行をそれぞれ下の例から選んで記入しよう。Aの1/2は、1/2の和音進行を使ってもよい。

② 拍子を決めて記入し、各和音の構成音を中心に旋律をつくらせて記入しよう。

③ 速度、強弱、スラーやスタッカートなどを考えて記入し、最終に楽譜を付けよう。

(教科書P84)

つくったピアノ曲をアレンジする

つくったピアノ曲をアレンジしよう

① ②ページでつくったピアノ曲を、下の《さまざまなアレンジ例》を参考にアレンジしよう。

さまざまなアレンジ例 (教科書P84の例を参考)

① 左手の和音にスライドを付けるアレンジ例

② 右手の和音にスライドを付けるアレンジ例

③ 左手の和音にスライドを付けるアレンジ例

④ 右手の和音にスライドを付けるアレンジ例

(教科書P85)

西洋音楽の鑑賞

好評をいただいている「西洋音楽史」をさらに充実させました。各時代の音楽的特徴を捉えやすい定番曲を厳選し、全30曲を鑑賞教材として掲載し、時代と作品との関連を分かりやすく示しました。音楽史は、当時の音楽の流行と関わりの深い文化的・歴史的背景にもしっかり触れることができるようにしています。

西洋音楽史の重要なトピックを豊富な図版とともに解説

各時代の音楽的特徴を理解しやすい定番曲

市民階級の音楽

19世紀の音楽は、急激に成長した市民階級とともに発展した。音楽は、教会や宮廷だけでなく、公開コンサートや私的なパーティーでも楽しむようになり、そこでは音楽やピアノが重要な役割を果たした。アコースティックな楽器として認識されたピアノは、その時代に広まっていく作品をつくり出し、音楽の歴史を変えた。

ピアノの登場

目的の楽器を演奏できる鍵盤楽器「ピアノ」は18世紀後半に開発され、時代を問わずに宮廷や貴族の社交的な遊びが加えられた。その時から貴族から、19世紀以降の西洋音楽において極めて重要な役割を果たすようになった。

19世紀後半のピアノ（グランドピアノ）は、18世紀後半のものと比べると、

丸い鍵盤を演奏し、大人

ヴァルトゥオーソの登場

貴族の音楽が衰え、民間や市民階級、政治について語り合った市民では、道徳的な価値観をもつ「ヴァルトゥオーソ」と呼ばれる民謡的な音楽が盛んになっていった。ヴァルトゥオーソでは、民謡的なリズム、ピアノでは、ヴァルトゥオーソと民謡の音楽である。

ヴァルトゥオーソを演奏するピアノ

さまざまな音楽ジャンルの発展

この時代には、音楽やオペラ以外の、さまざまな音楽ジャンルも発展した。

ジャンル	特徴
交響曲	古典音楽の発展に伴って、より複雑なメロディ、リズム、ハーモニー、シンフォニー、ヴァリエーション、マーラーなどの作曲家が活躍した。
オペラ	オペラは、音楽と物語の両方を表現する重要なジャンルであり、オペラハウス、オペラ座、オペラハウス、オペラハウスなどの劇場によって発展した。
バレエ音楽	バレエ音楽は、オペラと密接な関係にある音楽ジャンルであり、オペラハウス、オペラ座、オペラハウスなどの劇場によって発展した。
民謡音楽	民謡音楽は、民間音楽の発展に伴って、より複雑なメロディ、リズム、ハーモニー、シンフォニー、ヴァリエーション、マーラーなどの作曲家が活躍した。

菩提樹 選曲集《冬の歌》から

「菩提樹」は、ミューラーによる同名の詩に基づいてつくられた。失われた青年が春を待てる様子を24曲にわたって描いている。第1曲「菩提樹」では、若い恋を待てる人々の心から歌えようとする青年の心情を歌っている。

「菩提樹」は、ミューラーによる同名の詩に基づいてつくられた。失われた青年が春を待てる様子を24曲にわたって描いている。第1曲「菩提樹」では、若い恋を待てる人々の心から歌えようとする青年の心情を歌っている。

子供の情景

「子供の情景」は、シューマンによるピアノ曲集であり、さまざまな子供の情景が描かれている。

「子供の情景」は、シューマンによるピアノ曲集であり、さまざまな子供の情景が描かれている。

(教科書P.132・133)

各時代の音楽を理解するために重要な文化的・歴史的背景を掲載

各時代の知っておきたい主要な作曲家を紹介

(教科書P.128・129)

譜例、原語歌詞、発音、日本語訳を見やすくレイアウト

大人気の鑑賞教材、ベートーヴェン作曲《交響曲第9番》第4楽章を引き続き掲載しています。今回の改訂では、バリトン独唱以降の譜例と歌詞の一つの見開きページにまとめました。

新しい MOUSA 1 改訂のポイントは――

POINT 1

分かる・
できる

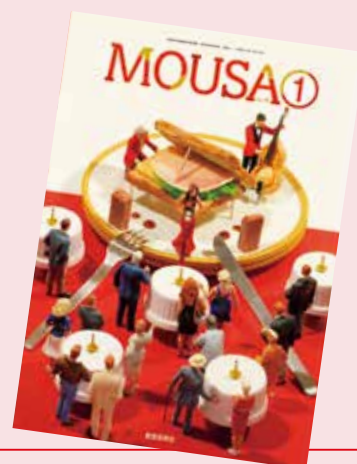
POINT 2

コミュニ
ケーション力

POINT 3

学びに
向かう力

現行『MOUSA 1』における改訂のポイントを引き継ぎ、
さらに充実した学習を促すよう工夫しました。



POINT 1 分かる・できる

スモール・ステップを意識した構成

読譜が苦手であっても、まずはリズムから親しめるよう、リズムを意識できるような問いや教材を教科書の前半に掲載しました。

めいなぼくじゃない

しらず しらず かく してた ほんとうの こえを ひびか せてーよ、ほら
しらず しらず かく してた ほんとうの こえを ひびか せてーよ、さあ

みない フリ し
みない フリ し

Non Chord(N.C.): コードなしで

23小節目から(78小節目からも同様)「♪」のリズムが繰り返されている。それによって生み出される効果について考えてみよう。

歌謡曲からJ-POPへの100年 116ページ

(教科書P13)

リズムを意識できるような問いを設置。「考えてみよう!」コーナーについてはP.27で詳しく解説しています。

分割されたリズムを打つ練習

「3連行」や右ページで説明している「シンコペーション」のリズムの感覚をつかむために、次の譜例を打ってみよう。1～8のリズムを通して打てるようになったら、順番を入れ替えて打とう。また、各自1つずつリズムを選び、順に続けて打とう。



(教科書P14)

教材に関連したソルフェージュ課題を取り上げ、スモール・ステップで効果的な学習を促します。

リズムを正確に打つ練習

拍を感じながらリズムを打とう。その際、休符が短くならないように注意しよう。



(教科書P18)

スモール・ステップを意識した紙面

生徒が達成感を1つずつ積み重ねていけるように工夫しました。

弦を押さえた左手の指をそのままスライドさせてストロークで演奏することで、簡単にギターの演奏を体験できます。

46

音楽の基礎から学ぶ「ギター」の基礎知識と演奏方法の解説書

ギター

ギターの源流は起源と考えられるものが明確に記録に登場するのは12世紀のことである。現在知られるクラシックギターは、19世紀末にスペインのギター製作者が改良を試みたものである。20世紀に入るとさまざまな種類のギターが作られ、ジャズやロックなど幅広いジャンルで用いられるようになった。

各部の名称

ギターはクラシックギター→FSL、フォークギター、エレキ(エレクトリック)ギター(1971年に大きく分けることができる。形状は別だが、フォークギターはクラシックギターに比べてボディが小さく、音域は狭く狭い。ここではフォークギターを取り上げる。

姿勢と構え方

●ビックで弾く場合
弾いた後の指を太鼓に押し戻す。弾いた後の指を太鼓に押し戻す。弾いた後の指を太鼓に押し戻す。

●指で弾く場合
人差し指の指先で弾く。人差し指の指先で弾く。人差し指の指先で弾く。

●指で弾く場合
弾いた後の指を太鼓に押し戻す。弾いた後の指を太鼓に押し戻す。弾いた後の指を太鼓に押し戻す。

●指で弾く場合
人差し指の指先で弾く。人差し指の指先で弾く。人差し指の指先で弾く。

右足の付け根にボディのくぼみをつける。その際、サウンドホールが上を向くようにする。

●指で弾く場合
弾いた後の指を太鼓に押し戻す。弾いた後の指を太鼓に押し戻す。弾いた後の指を太鼓に押し戻す。

●指で弾く場合
人差し指の指先で弾く。人差し指の指先で弾く。人差し指の指先で弾く。

右足の付け根にボディのくぼみをつける。その際、サウンドホールが上を向くようにする。

チューニング

チューナーを使って各開放弦の音を合わせる方法。まず5弦の開放弦の音を目で合わせて、その音を基準に残りの弦も順に合わせる方法もある。1弦の音も、ペグを回して音高を調整する。その際、音のずれもより目立つ場合は、いったんその音よりも低くしてから少しずつ上げていくとよい。

Let's Play the GUITAR 1

Let's Play the GUITAR 1

Let's Play the GUITAR 1

47

音楽の基礎から学ぶ「ギター」の基礎知識と演奏方法の解説書

⑤ 左手のポジション確認

右の姿勢を正しい姿勢に揃えて左手のポジションを確認しよう。ポジションを覚えたら、(木製のメロディーを弾いてみる。高い音域の弦に注意してみよう。

第1フレット

この音階は「ドレミファソ」の音階であること

TABLETの音の読み方

木曜(管弦楽団の音階)から

Andante maestoso

⑥ 弦を押さえた指をスライドさせて演奏しよう

STEP 1

- 右側の表に示したように弦を押さえた指の写真を参照し、「ダウン・ストローク」(D)で、(D)のリズムで演奏しよう。
- 次に、弦に示したように弦を押さえた指をスライドさせて演奏しよう。
- (D)のよう。1小節ずつ両手をスライドさせて演奏しよう。

そのとき、指を動かさず滑らかにスライドさせて演奏しよう。

① 1小節の音 ② 2小節の音 ③ 3小節の音

④ 4小節の音 ⑤ 5小節の音 ⑥ 6小節の音

⑦ 7小節の音 ⑧ 8小節の音 ⑨ 9小節の音

⑩ 10小節の音 ⑪ 11小節の音 ⑫ 12小節の音

⑬ 13小節の音 ⑭ 14小節の音 ⑮ 15小節の音

⑯ 16小節の音 ⑰ 17小節の音 ⑱ 18小節の音

⑲ 19小節の音 ⑳ 20小節の音 ㉑ 21小節の音

㉒ 22小節の音 ㉓ 23小節の音 ㉔ 24小節の音

㉕ 25小節の音 ㉖ 26小節の音 ㉗ 27小節の音

㉘ 28小節の音 ㉙ 29小節の音 ㉚ 30小節の音

㉛ 31小節の音 ㉜ 32小節の音 ㉝ 33小節の音

㉞ 34小節の音 ㉟ 35小節の音 ㊱ 36小節の音

㊲ 37小節の音 ㊳ 38小節の音 ㊴ 39小節の音

㊵ 40小節の音 ㊶ 41小節の音 ㊷ 42小節の音

㊸ 43小節の音 ㊹ 44小節の音 ㊺ 45小節の音

㊻ 46小節の音 ㊼ 47小節の音 ㊽ 48小節の音

㊾ 49小節の音 ㊿ 50小節の音

51小節の音 52小節の音 53小節の音

54小節の音 55小節の音 56小節の音

57小節の音 58小節の音 59小節の音

60小節の音 61小節の音 62小節の音

63小節の音 64小節の音 65小節の音

66小節の音

(教科書P.46・47)

ストロークで演奏する前に1ステップ

左手でいきなり複数の弦を押さえるのではなく、まずは1音ずつフレットの位置を確認します。

準備段階では生徒がよく知っている楽曲《木星》を取り上げました。和楽器の三線を扱ったページ(教科書P.90・91)も同様に、「勘所」を確認するステップとして生徒がよく知る《島唄》を掲載しました。

左手のポジション確認

右の譜例を低い音から順に弾いて左手のポジションを確認しよう。ポジションを覚えたら、《木星》のメロディーを低い音域、高い音域の順に演奏してみよう。

演奏は1オクターブ下

取り組みやすさに配慮した選曲

取り組みやすく、かつ、生徒がよく知っている楽曲を増やしました。一例として、『小学生の音楽6』に掲載されている《いのちの歌》を、『MOUSA1』（教科書P.66・67）ではリコーダーの教材として取り上げました。歌詞を載せて、二部合唱としても使用できるようになっており、「授業の始めに二部合唱できる簡単な曲が欲しい」という声にも対応しています。

より楽しく、気軽にグループ活動に取り組めるアンサンブル教材を掲載



(教科書P24～26)

ヴォイス・パーカッションの
演奏例を動画を確認できます。

ヴォイス・アンサンブル

アベタカヒロ氏によりヴォイス・アンサンブル用に編曲された《残酷な天使のテーゼ》を新たに掲載しました。

ヴォイパのコツについて説明



合唱曲

佐井孝彰氏の《言わない》(同三／伴奏付き)に加え、信長貴富氏の《早春》(混三／伴奏付き)、三宅悠太氏の《いつか、海へ》(混四ア・カペラ)を新たに収録しました。その他、取り組みやすいア・カペラの入門曲やミュージカル・ナンバーも取りそろえました。

宮下奈都氏(作家)と三宅悠太氏(作曲家)
による、本書のための書き下ろし作品



(教科書P129～131)

こちらの二次元コードより、
楽曲の一部をご視聴いただけます。



ポピュラー・ソング

歌謡曲からJ-POP、ミュージカル・ナンバーまで、
それぞれの時代を彩った歌を選びました。

2020年代 《群青》(P.12・13)

2000年代 《いのちの歌》(P.66・67)
《若者のすべて》(P.16・17)

1990年代 《残酷な天使のテーゼ》(P.24～26)
《歩いて帰ろう》(P.15)

1980年代 《クリスマス・イブ》(P.119)

1970年代 《翼をください》(P.14)

1960年代 《真赤な太陽》(P.118)

1950年代 《Do-Re-Mi》(P.70・71)

会話を参考に《この道》を分析 「主体的・対話的で深い学び」の本質に触れることができます。

36

《この道》徹底調査!

この道は、作曲の知識を深めるだけでなく、音楽と生活のつながり、そして音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

1 特徴的なリズムが体感される。

音楽のピアノの伴奏は、リズムが「ドレミ」だ。これは、音楽の基礎となるリズムで、音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

先生、いったいそれがどうしてリズムなのですか?

音楽の基礎、この「ドレミ」は、音楽の基礎となるリズムで、音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

2 臨時記号が複数現れる。

音楽からこの臨時記号の曲、どうしてこれだー? これって、音楽の基礎となるリズムで、音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

確かに、この「ドレミ」は、音楽の基礎となるリズムで、音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

37

5 曲の音階が変化する。

この「ドレミ」は、音楽の基礎となるリズムで、音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

6 歌の旋律にスラーが現れる。

うーん、スラーでも、音楽の基礎となるリズムで、音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

7 非和声音が変化を与える。

この「ドレミ」は、音楽の基礎となるリズムで、音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

8 メロディ・スタッカートが現れる。

曲も、音楽の基礎となるリズムで、音楽の力で人を動かす力について学ぶことができます。

(教科書P36・37)

POINT 3 学びに向かう力

「考えてみよう!」コーナーの新設

生徒が楽譜に興味をもち、音楽について主体的に考えるきっかけとして、それぞれの楽曲の特徴について、音楽を形づくっている要素などに着目して考えることのできる問いを用意しました。

SAMPLE

23小節目から(78小節目からも同様)「♪♪♪」のリズムが繰り返されている。それによって生み出される効果について考えてみよう。

23小節目から(78小節目からも同様)「♪♪♪」のリズムが繰り返されている。それによって生み出される効果について考えてみよう。

(教科書P13)

楽曲それぞれに最適な問いを設置

※レイアウト等の都合により、全ての楽曲に設置されているわけではありません。

23小節目から(78小節目からも同様)「♪♪♪」のリズムが繰り返されている。それによって生み出される効果について考えてみよう。

23小節目から(78小節目からも同様)「♪♪♪」のリズムが繰り返されている。それによって生み出される効果について考えてみよう。

(教科書P34)

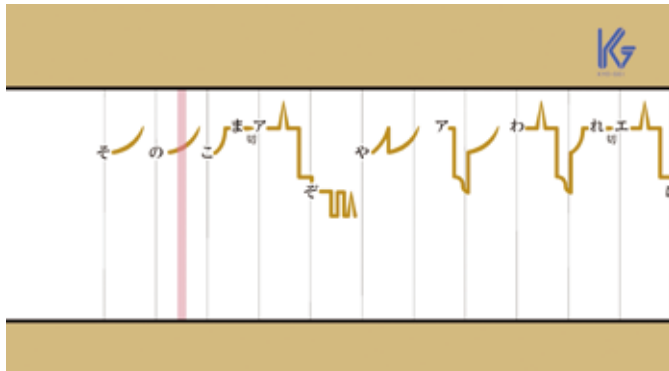
27

二次元コードコンテンツ

高校生の音楽 1

西洋音楽、世界の諸民族の音楽、日本音楽の鑑賞に役立つ動画などを豊富に収録しています。

日本音楽の手本動画



雅楽《其駒》の手本

こちらの二次元コードより、
実際の二次元コードコンテンツを
ご視聴いただけます。



日本音楽の鑑賞は、絵譜を
見ながら音源を聴ける動画
で手厚くサポートします。

鑑賞動画



〈ラ・カンパネッラ〉演奏



ジャワ・ガムランの解説

西洋音楽や世界
の諸民族の音楽
の動画も用意し
ています。

MOUSA 1

音声や動画など充実した二次元コードコンテンツを用いて、実際に視聴しながら確認することにより、知識を確実に習得できます。

こちらの二次元コードより、
実際の二次元コードコンテンツを
ご視聴いただけます。



指揮の振り方を動画で分かりやすく解説



指揮にチャレンジ

ドラムスの演奏方法を動画で確認



バンド・アンサンブルに挑戦

教科書に縦書き歌詞が掲載されていない
教材は歌詞を表示。その他、発声や楽器
の奏法などを動画でサポートします。

その他のコンテンツ



ピアノ伴奏のある表現
教材はピアノ伴奏を聴
くことができます。

コードの押さえ方を動画で確認



《Heidenröslein》
(野ばら)の朗読



ギター／キーボード・コード表

その他、外国語歌曲の原語歌詞の朗読やリズム読みなどで学習をサポートします。



デジタル・コンテンツの活用につなげる

教科書の創作ページは、キーボードなどを使いながら音の組み合わせや
つなげ方を試し、五線に記入する従来の方法に加え、五線の代わりにICT
機器や音楽Webアプリケーション(「カトカトーン」など)を用いて学習で
きる内容となっています。

カトカトーンについて

教育芸術社が開発した、Webブラウザ上で楽しく感覚的に音楽制作がで
きる音楽Webアプリケーション。



こちらの二次元コードより、
カトカトーンの詳しい
情報をご覧いただけます。

予告 教師用WEBコンテンツについて

「各教材のワークシート(Word・PDF)」 「カトカトーンのサンプルファイル(ktk)」他、
学習を支援するコンテンツをホームページから自由にご利用いただけます(現在準備中)。

最新情報：教芸Webサイト <https://www.kyogei.co.jp/>



インタビュー〈下〉

“音になった言葉”が伝えるもの

「言葉をつむぐ」「歌詞を読む・歌う」をテーマに
作詞家・詩人の覚 和歌子先生へと迫る本インタビューの後編では、代表作『いつも何度でも』の創作秘話や、
音と言葉の関係性、そしてそれらを「伝える」ということの本質について深めていきます。

聞き手 三宅悠太

作詞家・詩人 覚 和歌子

「音としての言葉」への魅力

三宅：小学生の頃から合唱部に所属し、中学から高校までは軽音部と掛け持ちしながら合唱活動、そして学生時代にはミュージカル研究会で作曲をされていたそうですね。こういった音楽経験がご自身の創作とどのように結び付いているのかについて教えてください。

覚：歌うことが小さい頃からほんとうに好きでした。何かをやりながら、工作しながらとかブランコに乗りながらとか、それがそのまま歌になってしまうような。ちょっと大げさに言えば、生きることと歌うことが一体化していたみたいな感じです。

三宅：覚さんが過去にTBS こども音楽コンクールの独唱の部に出演されていたということも知っていたいへん驚きました。こうした音楽活動は叔母様からの影響が大きかったと伺っています。

覚：叔母はいつもギターの弾き語りをしていました。叔母と一緒に歌ったり、家族みんなで彼女が出るラジオを聞いたり。結局彼女はプロの音楽家にはならなかったんですけど、今でもギターを弾いたり、合唱団で指揮をしたりしています。

三宅：その叔母様と出会われたことで、覚さんと音楽とのつながりがより豊かなものになったのですね。

覚：影響は相当受けていますね。あの頃の昭和歌謡って短調の曲が多かったんですよ。逆にフォークソングは長調の曲が多くて、私も明るくて悲しい長調の空気感が好きなので、叔母と波長があったのかもしれないです。

三宅：作曲はいつ頃から始められたのですか？

覚：最初に作曲したのは小学1年生の頃にオルガンでつくった、庭に咲いていた赤と白のバラの歌です。叔母がやっていたのを見よう見まねで、そのときから曲をつくることも楽しいなと感じていました。

三宅：僕より早いんですね(笑)。8歳のときに初めて『私の好きなもの』という詩を書いて、このとき「将来、作詞家になる」とお母様に宣言されたと著書で拝見しました。歌もお好きだったと思うのですが、言葉をつむぐことのほうが、より将来と結び付いたという感覚だったのでしょうか？

覚：先ほどの話とつながるのですが、文字や意味ではなく「音としての言葉」に私はいちばんアクセスが強いんです。それは自分が好きで歌う中で出てきた言語感覚で、そこから作曲や詩の朗読にもつながっていく。文字の言葉ではなく音、響きとしての言葉には、ある種の呪術性があるんですよ。はるか昔には文字がなかった、その記録できない原初の言語のありように強くひかれるんです。

三宅：宗教音楽しかり、仏教の^{とな}唱えしかり。識字率が低かった時代にも、音にすることで人と人とがつながっていったというのは、私たち人間に内在している不思議な力が生きているのかなと感じます。

覚：存在しているって波動を出していることですよ。音になった言葉は相手の細胞や感情の振動に直接働きかけられるんです。それがお互い干渉し合って共振を生んで、そこから何か普通じゃないことが起こるんだと思う。

三宅：僕は結構、ホールの客席で聴く整頓された合唱の響きよりも、練習のときに教室で聴く生めかしい音のほうが好きなんです。増幅や脚色のない、その人がもっているいちばん自然な波動に触れる感覚という意味では、朗読なども舞台の本番を聞くより、稽古のときの距離感で聞く音に魅力を感じます。

覚：ピアノって音と音の間にあるもののことが語られますけど、言葉も同じで、言葉がまとっているその周りの震えのほうにエネルギーの本体が宿る。行間と言ってしまうとそれまでだし、あわい⁽¹⁾という言い方もありますが、目に見えたり音に

なったりしていることの周りにまとうものが本体なんじゃないかなって思うんです。そのほうが「伝わる」ということに近い感じがしませんか？

三宅：ほんとうにそうですね。私は音を演奏するときに3つの段階があると思っていて。楽譜に書いてあるからやるという「義務」の段階。なぜそう書いているのかを自分なりに考え、楽曲により共感をもって奏するという「共感」の段階。そして、それが最高潮に達することで自分の中の器からあふれ出し、人と人とがつながる「共有」の段階になる。まさにこのあふれ出す、まとうときに、音をただなぞるだけじゃない、そこに出てきている音と音の間の言葉にならないものを私たちは感じているのだと思います。

覚：ああ、すごくおもしろい。あわいで共有しあい、あわいでつながるんですよ。

『いつも何度でも』創作秘話

三宅：覚さんを語るうえで絶対に欠かせないのが、2001年に公開された映画「千と千尋の神隠し」の主題歌『いつも何度でも』だと思います。

覚：この歌を歌われた木村弓さんとは〈メビウス∞気流法〉という身体術のお稽古仲間で、同じセミナーに向かう電車

音になった言葉は相手の細胞や感情の振動に直接働きかけられます。それがお互い干渉し合って共振を生んで、そこから何か普通じゃないことが起こるんだと思う。

Wakako Kaku



● 覚 和歌子 (かく・わかこ)

山梨県出身、千葉県育ち。早大卒業と同時に前衛ロックバンドショコラータで作詞家デビュー。ムーンライダーズ、平原綾香、SMAP、夏川りみ、クミコ、沢田研二などに多く作品を提供するほか、Nコン課題曲、合唱曲、校歌、市民歌、音楽教科書の書下し曲なども手掛ける。'01年映画「千と千尋の神隠し」主題歌『いつも何度でも』作詞でレコード大賞金賞。自らもシンガーソングライターとしてライブを展開。自唱CD 4枚の他、詩集『ゼロになるからだ』(徳間書店)、『覚和歌子詩集』(角川春樹事務所)など著作多数。映画監督、脚本、舞台演出、朗読、翻訳、絵本創作、米国大学における日本語講師など、詩作を軸足に活動は多岐。最新刊に『かっぱ語録』(谷川俊太郎氏と共著/角川春樹事務所)。



● 三宅悠太（みやけ・ゆうた）

東京藝術大学作曲科をアカンサス音楽賞および同声会賞を受賞して卒業後、同大学院修士課程作曲専攻修了。奏楽堂日本歌曲コンクール第12回作曲部門第1位。第79回日本音楽コンクール作曲部門（オーケストラ作品）第1位、併せて岩谷賞（聴衆賞）および明治安田賞受賞。管弦楽、室内楽、舞台音楽、合唱曲、ほか多岐に渡る作編曲を手がけ、これまでに数多くのソリストや演奏団体、学校、出版社等からの委嘱により作品を作曲。Nコン2016高等学校の部課題曲『次元』作曲者。作編曲活動の傍ら、全国各地より招聘され講習会講師や講演、各種コンクール審査員、客演指揮などを務めている。聖心女子大学、エリザベト音楽大学、都立総合芸術高等学校 各講師。

子どもの頃は何の屈託もなく歌っていたかもしれないけど、大人になって「あのときこんな歌詞の歌を歌っていたのか」と、時を経て人生の一部になっていくことってありますよね。

Yuta Miyake

の中でたまたま一緒になったことをきっかけに話すようになりました。彼女は作曲もされるので、じゃあ今度一緒に何かつくりましょうということになって。千と千尋の前に、3曲ぐらいはつくっていたのかな。

三宅：そのときもライター⁽²⁾を使ったスタイルの曲だったのですか？

覚：そうですね。『いつも何度でも』は曲先^{きょくせん}だったのですが、15分ぐらいであっという間に詞が書けちゃったんですよ。最初に曲を聴いてから自分の中に音やメロディーを落とし込むんですが、ワンコーラス目の後半部分に差し掛かったところで自分の感情とは全く関係なく涙がだらだら出てきて。それと同時に「さよならのときの 静かな胸 ゼロになるからだ が 耳をすませる 生きている不思議 死んでいく不思議 花も風も街も みんなおなじ」⁽³⁾というこの言葉がやってきて「ああ追いつかないっ」と思いながら、ものすごい勢いでキーボードを叩いていたという記憶があるんですよ。ある種の神秘体験でした。

三宅：言葉を書く才能がない僕には、あの3拍子のシンプルな曲から神秘的な言葉は全く想像されなくて、覚さんがどのようにしてあのような世界観をつむがれたのか、不思議にも感じていました。

覚：さらにその前のエピソードをお話すると、「もののけ姫」を見た木村弓さんが感動して、宮崎駿監督に自分の歌の音源を同封したファンレターを送るんです。それを聴いた監督から、当時企画が進んでいた「煙突描きのリン」という映画に関連して「もしかしたらこの企画の音楽をお願いするかもしれない。だけど、企画は潰れるものなので期待しないで待っていてく

ださい」という内容のお返事が届いたそうです。当時、木村さんの頭の中に繰り返しやってくるメロディーがあって、これがもしその映画のテーマソングかもしれないと思ったら、彼女も涙がぼろぼろ出てきたと言うんです。これは普通じゃないことが起きていると思い、彼女はそのメロディーを採譜して、手紙に書いてあった企画のあらすじを元に詩を書こうとしたけれど、「呼んでいる 胸のどこか奥で いつも心踊る 夢を見たい」⁽³⁾まで書いたところでその先が出てこなかった。そこで、その続きを私に書かないかと投げかけてきてくれたんですね。

三宅：詩の最初の部分は木村さんがお書きになっていたのですね。

覚：はい。それに続く歌詞を書いてお見せしたら「ライターを持って歌いに行くから、細かいところを調整しましょう！」という話になって、ああでもないこうでもないと言いながら手直しして、それを録音してまた宮崎監督に送りました。しかし、監督からのお返事は、「煙突描きのリン」という企画はなくなりました。でもその歌は大切に歌い続けてください」という内容でした。しばらく経って、突然ジブリから電話がかかってきて、「あの曲を「千と千尋の神隠し」という新作のテーマソングに使ってもいいですか」と尋ねられたんです。「もちろんうれしいですけど、歌と映画とで内容が違いますよ」

と伝えたところ、「監督があれをエンドレスで流しながら作業していました。映画の結末をあの歌に託したと言っています。」奇跡のようなエピソードですね。

三宅：木村さんは言葉に対して、まるで言霊を宿すように歌っていらっしやいますよね。やすりで削ってノーマライズしていかない歌唱。言葉をかみしめられ生かすべく定量的なリズムからはみ出していたり、言葉の延長線のごとく音程にも自由さがあったり、息がまじった生めかしさがあったり……。あんなにシンプルな曲なのに、やけに胸に突き刺さってくる。

覚：彼女の歌唱には使命のようなものを感じます。子どもの頃に聞き流して、大人になってからもう一度聴き直したときに、この曲の歌詞はこういう意味だったんだと気付かされたという方の話もよく聞きます。

“まいた種が花開く” 経験を目指して

三宅：ちょっと話が膨らんじゃうんですけど、20世紀初頭に童謡運動ってありましたよね。例えば、西条八十作詞、成田為三作曲の『かなりや』は、音楽的にも結構アバンギャルドな手法を使っているんですけど、歌詞もすごくて。

覚：私もドキドキしながらあの曲に向かい合った記憶があります。でもあの何か際どい感じがいいんですよ。

三宅：子どもの頃は何の屈託もなく歌っていたかもしれないけど、大人になって「あのときこんな歌詞の歌を歌っていたのか」と、時を経て人生の一部になっていくことってありますよね。

覚：特に子どもは歌の意味が分からなくても身体反応で歌うでしょう。言葉のエネルギーがダイレクトに細胞に定着するんですよ。大人になってからどこかのタイミングでその言葉の意味が封印を解いて、その瞬間人生と言霊が響き合うみたいなことって起こり得ると思う。まいておいた種がそこで花開くみたいなことが起きる。

三宅：『ふるさと』だって、小さい頃はみんなうさが美味しい歌だと思って歌っていたのに、大人になってあんなにドラマティックな深い歌詞だって気付かされたり。

覚：そうそう。幼い子どもたちが意味も分からず歌っている感じがいいんですよ。「千と千尋の神隠し」の封切り直後、電車の中で小学3年生ぐらいの女の子たちが『いつも何度でも』を一斉に歌いだしたことがありました。彼女たちは覚えた歌をただ歌っていただけなんでしょうけど、そこには何か独特の空間が生まれて、いろんな意味ですごい奇跡を目の当たりにした思いでした。

三宅：同感です。そうそう、先ほどの細胞の話と同じで、

私の大好きなピアニストの内田光子さんが、「研究好きな今と違って20代の頃は肉体の赴くままにピアノを弾いていたけど、そういう時期がとても大事」と。「あのとき体に取り込んだもの・感覚があるから、今いろんなことがひとつに統合されてきたのであって、まずは体に染み込ませるという経験がないと、いくらあとで知識や情報を重ねたとしてもひとつにならない」という話をされていたのが印象に残っています。

覚：もうほんとうにその通りだと思います。若気の至りだとしても身体を通じてしでかしたことに無駄なんてない。ピアノと歌とでは言語が絡んでくるというところでちょっと違うかもしれないんですけど、ボーカリストの場合も言葉に対する向き合い方にそこまでの人生全部が表れると思います。発語感覚の深度、発声、身体の鳴らし方、最終的に積み重ねた経験が交わって一つの表現に昇華されていく。

三宅：全てのことがひとつに統合されていていっているわけですね。最後に、今後の覚さんのビジョンや抱負について、そして子どもたちに向けたメッセージがあればお願いします。

覚：私の“魂のスケジュール”があるとすれば、何かまだ課題があるなと感じています。それが具体的には何か分からないんですけど、やらなければならないミッションがやりたい表現と結び付いているような。それを超えたあとにどんな言葉が出てくるかは、すごく楽しみです。それと、子どもたちには歌に身体を預けきるという経験をしてもらいたいと思います。先日とある児童合唱団の練習に立ち会わせてもらったときに、みんな首が前に出ている状態で歌っていたんですよね。歌と身体が乖離している印象を受けました。おそらくスマホとかディスプレイを見続けている生活のせいじゃないかと思うんですけど、合唱なんていうアナログでリアルな現場では、自分の声に身体に、また友達の声に耳をすませながら、生身で生きて歌っていることを全集中で味わってほしいですね。



取材は2024年11月15日、自由が丘で行われた

ピアノ協奏曲について

ピアノ協奏曲とは、ピアノとオーケストラのための作品。ピアノが主役として、オーケストラと向かい合い、ときに争い、ときに一つとなる。基本的には急緩急の3つの楽章からなり、ゆったりとしたテンポの第2楽章は間奏曲的な性格のものが多い。ほとんどのピアノ協奏曲には、カデンツァという、ピアニストの腕の見せどころとなる一人舞台（無伴奏）のシーンがある。そこでは、作曲家が書いたものを弾く場合もあるし、ピアニストが即興で弾く場合もある。

あなたにおすすめの作品は？

A 華麗で繊細、ジャンル最高峰の一曲 モーツァルト『ピアノ協奏曲第23番』 (初演:1786年/ウィーン)

ウィーンでフリーランスの音楽家（作曲家兼ピアニスト兼家庭教師）として活躍していたモーツァルトにとってピアノ協奏曲は、自作自演するものであり、その新作は自主演奏会のメインというべき存在であった。ピアノ協奏曲第23番は、彼のピアノ協奏曲のなかで最も優美な作品であり、第2楽章には深い悲しみが感じられる。



B 甘美で幻想的な世界観に魅了される シューマン『ピアノ協奏曲』 (初演:1846年/ライプツィヒ、ゲヴァントハウス)

ドイツの作曲家、シューマンは、1840年にピアニストであるクララと結婚し、幸せのなか、1841年～1845年に彼女のためにピアノ協奏曲を作曲した。そして、ピアノ協奏曲は1846年にクララの独奏で初演された。第1楽章冒頭こそ衝撃的だが、あとは徹底してロマンティックな音楽。第2楽章はピアノとオーケストラによる優しい語らいのような間奏曲。



C インパクト抜群の冒頭に一瞬で心をつかまれる グリーグ『ピアノ協奏曲』 (初演:1869年/コペンハーゲン、カシノホール)

グリーグはノルウェーを代表する作曲家。彼は民族主義的な音楽を書いたが、若い頃、ドイツのライプツィヒに留学していたため、ドイツ・ロマン派の影響も受けている。このピアノ協奏曲の冒頭は、一度聴いたら忘れられない衝撃的なピアノの力強い下降音型で始まる。全体的には、北欧の自然や爽やかな空気が思い浮かぶような美しい作品である。



D 壮麗な風格が漂う作曲家渾身の大作 ベートーヴェン『ピアノ協奏曲第5番「皇帝」』 (初演:1811年/ライプツィヒ、ゲヴァントハウス)

ドイツの作曲家、ベートーヴェンが残した5つのピアノ協奏曲のなかで最も人気の高いのが第5番。オーケストラの和音によって、いきなり独奏ピアノが華麗な技巧を披露する第1楽章冒頭が非常に印象的。「皇帝」のニックネームは、作曲者がつけたものではないが、作品の華麗で堂々とした性格をよく表し、広く親しまれている。



E 重厚な響きで聴く人を圧倒する チャイコフスキー『ピアノ協奏曲第1番』 (初演:1875年/ボストン、ボストン・ミュージック・ホール)

ロシアの作曲家、チャイコフスキーのピアノ協奏曲、といえば、この第1番を指すことが多い。第1番の第1楽章、ホルンの勇壮な吹奏に導かれて、オーケストラが雄大なメロディーを歌い上げ、独奏ピアノは伴奏にまわって和音を奏するという冒頭はとても画期的であり、印象的である。第3楽章の主題はウクライナ民謡から採られている。



F ピアニストの圧巻のパフォーマンスを堪能できる ラフマニノフ『ピアノ協奏曲第3番』 (初演:1909年/ニューヨーク、カーネギーホール)

ロシア出身のラフマニノフは、作曲家であると同時に20世紀前半を代表するピアノの名手の一人であった。彼の作品はロシアの哀愁を感じるロマンティックなメロディーで人気が高い。ピアノ協奏曲では、第2番のほうが映画音楽にも使われたのでポピュラーかもしれないが、第3番のほうが音楽的内容でもピアノの技巧の華やかさでも聴き応えがある。



G 創作と研究に心血を注いだ作曲家の集大成 バルトーク『ピアノ協奏曲第3番』 (初演:1946年/フィラデルフィア)

ハンガリーを代表する作曲家、バルトークは、民謡採集（採譜・録音）に熱心に取り組む、その研究成果を創作活動に生かした。1940年にナチスを逃れてアメリカに移住。晩年は白血病に侵され、ピアノ協奏曲第3番の最後の17小節を未完のままこの世を去った（弟子が補筆・完成させた）。この作品でもハンガリー民謡のような旋律が現れる。



山田治生（音楽評論家）

1964年、京都市生まれ。1987年、慶應義塾大学経済学部卒業。著書に『トスカニーニ 大指揮者の生涯とその時代』、小澤征爾の評伝である『音楽の旅人 ある日本人指揮者の軌跡』、『いまどきのクラシック音楽の楽しみ方』（以上、アルファベータ）、編著書に『戦後のオペラ』（新国立劇場運営財団情報センター）、訳書に『レナード・バーンスタイン ザ・ラスト・ロング・インタビュー』（アルファベータ）などがある。



研究大会

6月

June

20日(金)

第67回 近畿音楽教育研究大会 兵庫大会
神戸国際会館「こくさいホール」他

〈大会主題〉

「音楽の学びがつなぐ 音・人・未来」

参加申し込みサイト[日本旅行申込みサイト(Apollonサイト)]
<https://va.apollon.nta.co.jp/kinkimusic2025/>

[問い合わせ]

神戸市立東灘小学校 校長 高原良幸

〒658-0013 神戸市東灘区深江北町2丁目4番1号

TEL 078-411-0556 / FAX 078-411-0557

yos-takahara@kobe-c.ed.jp

11月

November

7日(金)

第67回 関東甲信越音楽教育研究会
埼玉大会(戸田大会)

戸田市文化会館 他

〈大会主題〉

アナログ×デジタルで進化(深化)する
音楽の授業における個別最適&協働的な学び

[問い合わせ]

埼玉大学教育学部附属小学校 三橋博道

〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤6-9-44

TEL・FAX 048-833-6956

onkyouren@gmail.com

10月

October

23日(木)・24日(金)

令和7年度 全日本音楽教育研究会全国大会
(小・中・高校部会大会) 佐賀大会

第66回 九州音楽教育研究大会 佐賀県大会

第26回 佐賀県音楽教育研究大会 佐賀・小城・多久地区大会

佐賀市文化会館 他

〈大会主題〉

育てよう 音楽と豊かに関わる子ども

～音楽科における「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善と
「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を通して～

[問い合わせ]

佐賀市立城北中学校 校長 末次知子

〒849-0921 佐賀県佐賀市高木瀬西三丁目1番50号

TEL 0952-30-9258 / FAX 0952-30-2360

<https://saga-ken-on-ken.jimdosite.com>

7日(金)

第73回 東北音楽教育研究大会 福島大会

ふくしん夢の音楽堂 他

〈大会主題〉

かがやく瞳・きらめく音・ときめく心を育む音楽の学びを求めて
～音楽科授業において「主体的に学習に取り組む態度」をどう評価するか～

[問い合わせ]

福島市立平野中学校 校長 佐藤裕子

〒960-0231 福島市飯坂町平野字館ノ前3-3

TEL 024-542-3074 / FAX 024-543-0652

head.hirano-j@fcs.ed.jp

14日(金)

第56回 中国・四国音楽教育研究大会 鳥取大会

とりぎん文化会館 他

〈大会主題〉

おんがくっていいな!

～つなげよう拓こう未来を 音の心で～

[問い合わせ]

鳥取市立桜ヶ丘中学校 教頭 山内かおり

〒680-0853 鳥取県鳥取市桜谷227

TEL 0857-22-8301 / FAX 0857-22-8302



教育芸術社ウェブサイトでは、
この他の研究大会やイベントなどの
情報も掲載しています。

https://www.kyogei.co.jp/data_room/event/

20日(木)・21日(金)

第19回 東海北陸小中学校音楽教育研究大会
岐阜大会

第35回 岐阜県音楽教育研究大会
岐阜市民会館 他

〈大会主題〉

楽しさと確かさの中に美しさを求める子をめざして
～子どもの可能性を引き出す音楽科の授業～

〔問い合わせ〕

岐阜市立島小学校 校長 野原美登里

〒502-0911 岐阜県岐阜市北島7-6-12

TEL 058-231-2392 / FAX 058-231-2356

<https://qifuxianxiaozhongxuexiaoyinlekeyanjiubuhui0.webnode.jp/>

12月

December

5日(金)

第67回 北海道音楽教育研究大会 札幌大会
札幌市教育文化会館 他

〈全道共通主題〉

音楽のよさを分かち合い 確かな力を育む音楽教育

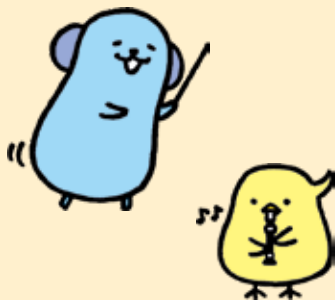
〔問い合わせ〕

札幌市立新川中央小学校 校長 鈴木秀和

〒011-0923 札幌市北区新川3条3丁目2-1

TEL 011-761-1511 / FAX 011-761-9607

hidekazu.suzuki@sapporo-c.ed.jp



Spring Seminar

スプリングセミナー2026

— 新作合唱曲による公開講座 —

コンクール自由曲向けの新曲発表会「スプリングセミナー2026」を開催いたします。

同声・女声・混声の作品を作曲者、司会者、合唱団と学びます。

※詳細や最新情報は弊社ウェブサイト等でご確認ください。

●日 程：2026年3月下旬

●司 会：藤原規生

●お問い合わせ：

株式会社教育芸術社

スプリングセミナー実行委員会

TEL 03-3957-1168

FAX 03-3957-1740

<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は弊社ウェブサイトで
随時公開いたします。

<https://www.kyogei.co.jp/spring-seminar/>



最新情報は、スプリングセミナーの
Facebookでも発信いたします。

<https://fb.me/kgsspringseminar/>

内容は予告なしに変更となる場合がございます。

詳細は
こちら



編集後記

「学校の中でなんとなく耳にしたり、なじんだりした音楽が自分には大事だった」。そうおっしゃるのは、巻頭インタビューにご登場いただいた小沼純一先生です。生活のそばにある音楽について多様な視点で「考える」——。それはおもしろいだけではなく、時代や文化、価値観を知るきっかけでもあることを小沼先生のお話から学びました。

あらゆる環境の生徒に寄り添い、音楽の価値や魅力を余すことなく伝えるべく生まれ変わった2つの教科書『高校生の音楽1』『MOUSA1』は、そうした音楽と向き合える教材や活動を豊富にそろえています。本書との出会いが、音楽をより身近に、そして、生徒一人一人の人生を少しでも豊かにすることを願っています。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力を賜りました全ての方に、心より厚く御礼申し上げます。今後ともご支援くださいますよう、お願い申し上げます。

表紙・巻頭イラストレーション
たかなかな

写真撮影
島崎信一 (STUDIO S+PLUS)

写真提供
藤原道山

イラストレーション
KAnaMi

表紙デザイン・本文組版
STORK

音楽教育 ヴァン



発行者 株式会社 教育芸術社
(代表者 市川かおり)
〒171-0051 東京都豊島区長崎1-12-14
TEL. 03-3957-1175(代)
FAX. 03-3957-1174
https://www.kyogei.co.jp/
©2025 by KYOGEI Music Publishers. ①-25
本書を無断で複写・複製することは著作権法で禁じられております。

*ヴァンは“vent”はフランス語で「風」。
新しい音楽教育の地平を切り開いていく
願いを込めています。



Recommend

New Song ライブラリー【同声編⑤】 小学生のためのクラス合唱新曲集 ぼくの風船

- 入学式から卒業式までさまざまな場面で歌える魅力的な22曲。作者によるメッセージを全曲掲載!
- 定価1,650円(本体1,500円+税10%)／B5判／88ページ
- ISBN978-4-86779-002-1

準拠CD(別売り)

- 価格3,080円(本体2,800円+税10%)／1枚
- GES-16004



New Song ライブラリー【混声編④】 クラス合唱新曲集 心の声

- 授業や校内合唱コンクール、行事に...レパートリーが広がるシリーズ第4弾!
- 定価1,760円(本体1,600円+税10%)／B5判／104ページ
- ISBN978-4-86779-065-6

準拠CD(別売り)

- 価格3,080円(本体2,800円+税10%)／1枚
- GES-16058



Chorus ONTA Vol.29

- 授業に、音楽会に、コンクールに、さまざまな合唱活動で高い評価をいただいている混声合唱のためのパート練習用CD第29弾!
- 収録曲:道を歩けば／瞳をとじて見えるもの／14 -fourteen- / 懐かしい未来 / タイムリーバー / 桜、いつてきます / 虹 / Chessboard / ことばを追いついて / 前に
- 価格13,200円(本体12,000円+税10%)／4枚組
- KGO-1209~1212



増補改訂版 音楽史を学ぶ 古代ギリシアから現代まで

久保田慶一 編著

- 高等学校の鑑賞用副教材や大学などのテキストに最適な音楽史の新刊です!増補改訂版では、現行本では十分な記述がなかったアメリカ音楽史を大幅に加筆し、さらに2019年末頃からはじまったコロナ・パンデミックなど近年の状況についての説明も追加しました。
- 定価990円(本体900円+税10%)／B5判／216ページ、カラー口絵4ページ
- ISBN978-4-86779-067-0



オリジナル合唱ピース

- クラス合唱や全校集会、コンクール自由曲向けの新曲です。
- 【同声編116】ぼくがここに(まど・みちお 作詞/山下祐加 作曲)
- 【同声編117】はじまりー同声合唱とピアノのためのー(工藤直子 作詞/三宅悠太 作曲)
- 【女声編66】りんごへの固執 無伴奏女声合唱のための(谷川俊太郎 作詞/鷹羽弘晃 作曲)
- 【女声編67】見つめられて(吉野 弘 作詞/大熊崇子 作曲)
- 【混声編118】夏の星に 混声合唱とピアノのための(茨木のり子 作詞/根岸宏輔 作曲)
- 【混声編119】だいたい茜いろ。(福永 星 作詞/土田豊貴 作曲)

- 各定価660円(本体600円+税10%)／B5判



小学校・中学校・高等学校教科書訂正のお知らせ



教科書及び指導書の訂正を当社ウェブサイトに掲載しています。誠に恐れ入りますが、ご確認のうえ、ご指導の際にはご留意くださいますようお願い申し上げます。

教育芸術社 LINE公式アカウント



ぜひお友達登録
してください♪

はじめました!